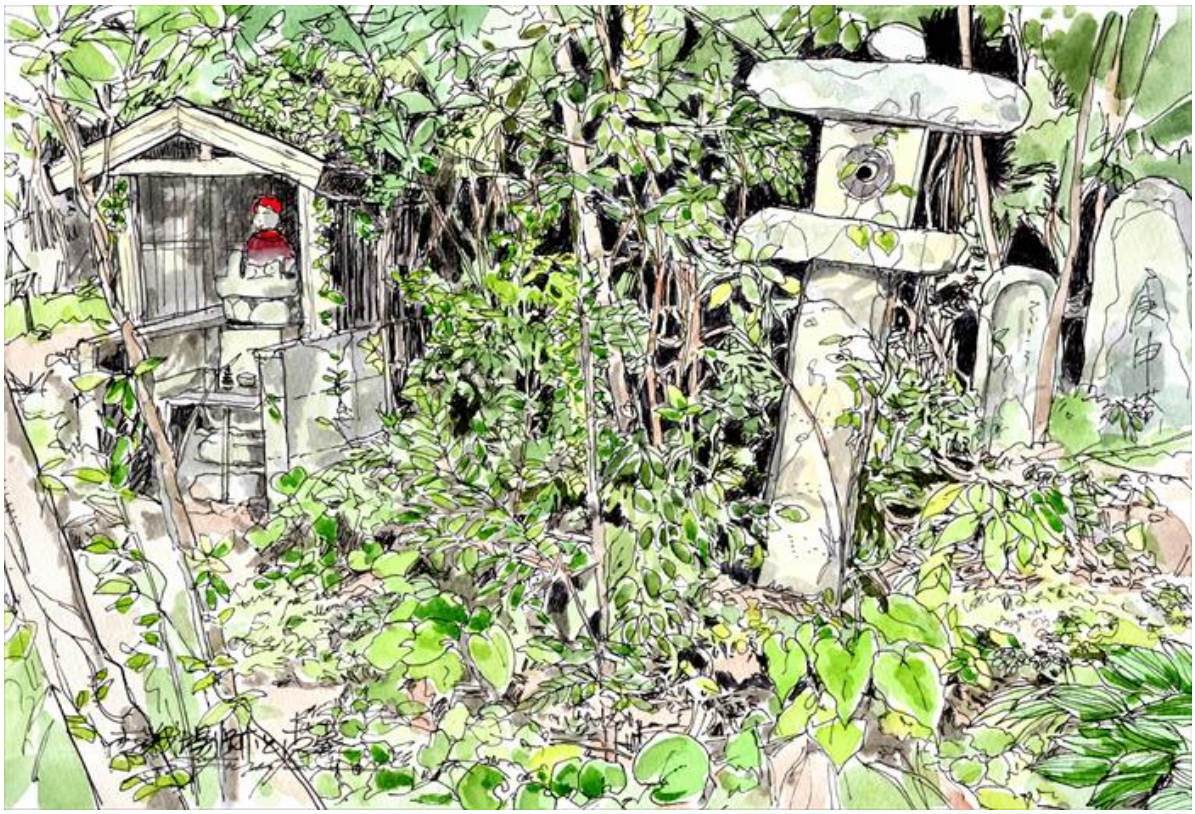
今日のイラスト 581「イラストでたどる石州街道⑪　古戦場跡と古墓」　　古谷眞之助



この場所は予め情報をしっかり掴んでおいて、実際に歩く時にも十分注意していないと見落とす可能性が高い。目印は左に見えるお地蔵様である。近所の方がお世話されておられるようで、作りも立派だから「お地蔵様、お地蔵様」と念じていれば、見落とすことはないだろう。

イラストでたどる石州街道 11 古戦場跡と古墓

宮野温泉・山口ふれあい館を過ぎると右手の山裾に地蔵堂と古墓が見えて来る。永禄12年（1569）毛利氏の大友攻めと同時に、その隙を突いて大内義隆の従兄弟、大内輝弘は大内氏再興を狙って山口を攻撃した。その際に津和野の吉見氏は毛利方に援軍を送り、宮野岩杖で戦いが繰り広げられた。古墓は戦死した吉見氏配下の赤木金次郎、伊藤左近らのものと言い伝えられており、この付近には多くの五輪塔も残っているという。

その輝弘は、高嶺城に立て籠もった毛利の城番役、市川経好の妻が率いる守備軍の激しい反撃にあってこれを落とせず、やがて毛利本軍が引き返してくると、撤退を余儀なくされ、防府の富海で自害するのである。

文・イラスト＝古谷眞之助

さて、今回も 2005 年 3 月に発行された県教育委員会による「歴史の道調査報告書 5 石州街道」と「宮野 800 年史」を参考にして書いている。触れている内容は江戸時代ではなくて大内氏の時代のことである。実は山口市に住んでおりながら大内氏の関する知識が恥ずかしい位に少ない。それで、大内氏に関する講演がある時にはできるだけ聴講するようにしている。昨年 11 月に開催された「築山館と大内教弘」、今年 2 月の「大内義弘と室町幕府」の二つは興味深く拝聴した。特に前者によれば、長らく大内氏の迎賓館的要素を持った居館とされていた築山館が、実は教弘が家督を政弘に譲った後に一時的に住んでいたもので、彼が亡くなると「築山大明神」として崇められ、祭祀の場となったという説にほぼ落ち着きつつあるとのことである。また、後者は室町幕府の中で実力を認められながら、やがて足利義満との間に確執が生じて「応永の乱」で殺害された大内義弘の話である。大内氏というと百済国の琳聖太子という祖先伝説が有名だが、これは義弘が言い出し始めたのだとか。大内氏のことをこれから学ぶということであれば、現在山口市が発行している「西国一の御屋形様・大内氏がわかる本」入門編と興亡編がイラスト満載で分かりやすいのでお勧めである。ただ、残念なことに義長の代までしか触れられておらず、輝弘は巻末の年表の最後の最後に少し出て来るだけである。義長の死後、大友氏の援助を受けて大内氏再興を目指して山口入りした輝弘は、一気呵成に築山館に入るも高嶺城を市川経好の妻、市川局の奮戦や毛利氏や吉見氏の巻き返しで、富海・茶臼山まで落ちのびて自刃することになる。旧山陽道沿いには輝弘の墓が残っているとのことだが、残念ながら以前富海を訪れた時には行きそびれた。

ところで、本文に書いた岩杖の戦いとは一体どんなものだったのだろうか。大内輝弘軍はざっと 2,000 名とする資料がある。一方、吉見氏救援軍は 1,000 名程度と言われている。輝弘軍は高嶺城でも戦っていたから、勢力を二分して 1,000 名を宮野に送ったとして、それ程広くもない宮野岩杖付近で双方合わせて 2,000 名が激突したのだろうか。この場所を歩いた時、とても 2,000 名が戦いを繰り広げたとは思えなかった。江戸時代に比べると大内氏の時代の史料は極端に少ないから、詳しいところまでは分からない。あの時代だから「遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ」だったのだろうか。（2023.2.22 記）